保育園における疾病の状況とその対応について

—茨城県下の保育園における小児保健動向調査より—

Disease Occurrence and Preventive Measures against Children in Nurseries

— Trend Report for Child Health in Nurseries in Ibaraki —

仲　島　愛　子
Aiko NAKASHIMA

宇田川春奈，飯島　一代，大嶋未奈美
小田部恵美，佐藤　友美，長峯　郁莉
張替美智子，日置麻衣子，森田　美穂
三好　玲子，市村　深雪，岩田まど香
坂本　佳織，瀧本　真希
—— 平成16年度入学生

はじめに

０歳児の保育が推進されている中で，保育園での小児保健の知識の必要性は益々高まっているといえる。しかし，現実には教科として学ぶことは実践の場で適応するのには不十分であることが多い。この研究は学生たちが現場では子供の病気にどのように対処しているのだろうかという疑問から始まった。

卒業後，現場での実践に役立てるため，保育園で保育士たちが日常の実践の中で子供の病気にどのように対処しているのかを知るためにアンケート調査を実施した。実践の場では基本的な対応はもちろんのこと，様々な対処についての設問し，保育士の現場での取り組みの多様さを理解できるように試みた。

研究結果は学生の卒業後の実践に役立つだけでなく，今後の小児保健の教授の参考となり，小児保健の授業が実践に基づいた実用的な知識となめための基礎となると考える。

１．研究目的—茨城県下の保育園における小児保健の動向と疾病へ対応について知り，今後の保育園での保育のための参考とする

２．研究方法—茨城県下441保育園・アンケート調査（調査対象期間は平成16年度とした）

３．研究期間—平成16年９月～17年９月（アンケート調査実施・17年６月～７月）

調査依頼441園，回収145　回収率33％

４．研究結果

Ⅰ．感染症について

表１　（感染児の多い感染症の順から）

	感染児数	感 染 率	感染の多かった月	平均欠席日数
水痘（水疱瘡）	1501名	一園平均 10名	６月	７日
流行性耳下腺炎	685名	4.7名	６月	５日
とびひ	643名	4.4名	７月	４日
手足口病	456名	3.1名	７月	３日
水いぼ	224名	1.5名	６月，７月	２日
プール熱	136名	1名	７月	３日
突発性発疹	119名	0.8名	６月	４日
りんご病	83名	0.6名	６月，７月	３日
風疹（三日ばしか）	24名	0.2名	４月	４日
麻疹（はしか）	23名	0.2名	４月，５月	６日

保育園において予防のために実施していること

表2

	手洗い	うがい	物品の消毒	その他（自由記載）
水痘（水疱瘡）	89園実施 実施率61%	77園 53%	50園 38%	お便り，消毒（手，床），換気，感染隔離，早期受診，予防接種
流行性耳下腺炎 （おたふく風邪）	56園実施 実施率38%	49園 34%	23園 16%	お便り，消毒（手，床），換気，検温，視診，予防接種
とびひ	81園実施 実施率56%	46園 32%	47園 32%	お便り，消毒（手，床），爪きり，タオルを共有しない，肌の接触を避ける，虫除けスプレー，ガーゼで覆う，プールの禁止，シャワー浴
手足口病	65園実施 実施率45%	50園 34%	34園 23%	お便り，消毒（手，床），洗眼
みずいぼ	40園実施 実施率28%	25園 17%	22園 15%	消毒（手，床），プールの禁止， 靴下を履く，接触を避ける
プール熱	42園実施 実施率29%	37園 26%	17園 12%	消毒（手，床）タオルの持参，洗眼，検温
突発性発疹	33園実施 実施率23%	28園 19%	19園 13%	消毒（手，床）
りんご病	22園実施 実施率15%	19園 13%	10園 7％	消毒（手，床），早期通院
麻疹（はしか）	18園実施 実施率12%	16園 11%	19園 13%	消毒（手，床），早期通院 予防接種
風疹（三日ばしか）	20園実施 実施率14%	19園 13%	10園 7％	消毒（手，床），予防接種

1．感染症に罹患した小児の保護者への対応（複数回答）

病気について説明する（110園 76%），欠席日数について説明する（72園 50%），病気への対応について説明する（103園 71%），感染予防について指導する（99園 68%）

その他（自由記載）

お便りで通知する，お茶でのうがいを勧める，予防接種を勧める，早期受診を勧める，登所許可書をもらってから登園させる

2．保護者への対応をしている職員（複数回答）

園長（45園 31%），主任（97園 67%），担当保育士（101園 70%），看護師（28園 20%），その他（保健師）

3．感染症についての保護者からの質問（自由記載）

病気について（潜伏期，症状，治療方法，感染経路，感染率），欠席すべきか（どのくらい休めばいいか），病院にいったほうがいいか，どの程度になったら登園が可能か，直ったあとの登園の仕方，水いぼは取るべきか，他児の状況（他に感染者はいるか），仕事が休めないので

登園させたい

Ⅱ．小児の皮膚疾患について

1．アトピー性皮膚炎

①アトピー性皮膚炎の園児がいた保育園の数は114園で全体の78.6%，患児数104名

②アトピー性皮膚炎の園児の現在の年齢

0才―2名，1才―24名，2才―53名，3才―81名，4才68名，5才―72名，6才27名，7才―8名

③アトピー性皮膚炎の園児の発症年齢

0才―96名，1才―91名，2才―41名，3才―17名，4才8名，5才―2名，6才1名

④症状の重い季節（複数回答）

冬―162，夏―147，春―115，秋―81

⑤日常生活で気をつけていること（複数回答）

日光にあてないようにした（20園 17.5%），掻かないように，気を紛らわす工夫をしていた（79園 69.3%），気をつけて爪を切るようにしていた（72園 63.2%），食べ物に気をつけた（73園 64%）

その他（自由記載）

生活・清潔・皮膚の清潔につとめた，汗をかいたらシャワーで流す，タオルで清拭する，外遊びの後は皮膚の清潔につとめた，プール後，水道水で体をよく洗う，身の回りの物を清潔にする，肌着の交換，室温の調整（エアコン），食事・アレルギー等を調べてもらい，配慮食とした，除去食物について家族と連絡を取り合う，食物アレルギーもある子に対しては除去食を提供，除去食は医師の診断があった場合のみ，症状への対処・かゆくなったら冷やす，かゆがる時には薬を塗る，軟膏を預かり塗っている，抗アレルギー剤の内服，外用薬，内服薬をきちんと指示どおり投与，掻き傷のあるときは，傷の部分を清潔にする，血がにじむ箇所に包帯を巻く（砂遊びの禁止），保護者より注意事項の確認等をした

⑥保護者に指導していたこと（自由記載）

生活に関して・ひどくなったときのプールは不可，なるべく長袖，長ズボンの着用を勧める，保湿，衣類は綿のもの，衣服の清潔，夏の汗と冬の乾燥に注意，規則正しい生活，暑さが厳しいときはエアコン等を上手に使う，家族に喫煙者がいるときは同じ空間で吸わないように話す，入浴のときにこすり過ぎないように，部屋の空気の入れ替え，洗剤等に注意する，ぬいぐるみなどには触らないようにする，潔に関して・衛生面に気をつける（体を清潔にする），清潔にしてスキンケアを十分にしてください（肌の手入れ），爪を切るように話す，とびひの予防，包帯が汚れたら変えて清潔にしてもらう，出来るだけ汗をこまめに流したり拭いたりするように勧めた，食事に関して・食事について話す，食べ物で少しでも身体に悪いと思わ

れるものはやめるように話す

主治医の指導を良く聞いて，食べ物等に気を配るようにお願いした，症状に関して・医師の処方した薬があれば持参してもらう，ひどくなるときは病院で診察してもらう，病院等の専門機関の指示をあおぐこと，定期的な受診を勧める，病院の紹介・加療を勧める，主治医の指導をよく聞いて，食べ物等に気を配るようにお願いした，塗り薬を持参してもらう，アレルゲンの検査を勧めた，医師の指導をどのように受け止めているのかを聞き，出来る限り対応する，薬を途中でやめないで，主治医と良く相談して使用していくこと，傷になったところは早めに手当てをしてもらう，症状に改善が見られない場合，違う病院での診察をアドバイスする，通院を忘れずにすること，すぐに効果があることはまれであること（病院をすぐに変えない），皮膚科の受診を勧めた，症状についての報告をしてもらう，情報の提供，お互いの確認，軟膏の適切な使用法

2．小児ストロフルス（急性掻痒症）について

①小児ストロフルスの園児がいた保育園の数は８園（患児数19名，一園平均2.4名）

②小児ストロフルスの園児の現在の年齢

３才―３名，４才３名，５才―１名，６才１名，７才―８名

③小児ストロフルスの園児の発症年齢

１才―２名，２才―２名，３才―２名，５才―１名

④症状の重い季節（複数回答）

夏―８，春―１，秋―１，冬―１

⑤日常生活で気をつけていること（複数回答）

掻かないように，気を紛らわす工夫をしていた　（６園 75%）

気をつけて爪を切るようにしていた　（４園 50%）

食べ物に気をつけた　（１園 12.5%）

その他（自由記載）

虫刺されにならないように注意（虫除けスプレーの使用），かきむしってジクジクしたときはガーゼを当てて保護した，医師の指示に従っていただいた

⑥保護者に指導したこと（自由記載）

ストロフルスについて説明する，掻かないようにしていただく，周囲を清潔に保つように依頼する

Ⅲ．内臓疾患

1．気管支喘息

①気管支喘息の園児がいた園の数は100園，全体の68.9%，患児数103名，一園平均１名

②気管支喘息の園児の現在の年齢

1才—26名，2才—26名，3才—19名，4才6名，5才—11名，6才6名，7才—2名，9才—1名，10才—3名，11才—2名，13才—1名

③気管支喘息の園児の発症年齢

0才—34名，1才—64名，2才—38名，3才—22名，4才5名，ハッキリしない—37名，生まれつき—2名

④症状の重い季節（複数回答）

冬—85，147，春—73，秋—73，夏—43，季節の変わり目—10，特に無い—6名，不明—24

⑤日常生活で気をつけていること（複数回答）

保育室の掃除を徹底して実施した（21園 22%），花は飾らなかった（4園 4%），ホコリを立てないように工夫した（11園 11%），布団をよく干した（10園 10%）

その他（自由記載）

早めに症状に気づくように気をつけていた，エアコンの風邪が当たらないようにした，季節の変わり目や気圧の変化で起こりやすいので，早めに保護者に連絡する，保護者がまめに休ませている，喘鳴時は早めに連絡する，咳き込むときは牛乳禁止

⑥保護者へ指導していたこと（自由記載）

生活と清潔に関して・特に午睡布団の手入れと清潔に心がけてもらう

布団の消毒，生活のリズムを整え，規則正しい生活をしてもらう

症状に対して・喘鳴が聞かれている時は家族に連絡

季節の変わり目，台風が近づいているときは気をつける，早めに病院受診をするよう伝える，体調が悪いときは早めに休養を促す

行事の時は吸入に来てもらう，薬を切らさないようにする

⑦発作を起こしたときの対処法（複数回答）

すぐに保護者に連絡した（21園 21%），すぐに主治医に連絡した（0園 0%），すぐに薬を飲ました（噴霧）（5園 5%），しばらく様子を見るようにした（7園 7%）

その他（自由記載）

自宅で発作を起こした場合，そのときの様子，状況を必ず伝えてもらう，発作がおきると欠席して病院にいった，園では発作を起こしたことが無い

2．肺炎と風邪

①一年間に風邪から肺炎を併発した子供の数

（32園，104名，肺炎になった子供のいる園での一園の平均数は3名，全体では22%）

0人（5園），1名（9園），2名（8園），3名（4園），4名（2園），5名（4園），6名（1園），7名（2園），8名（0園），9名（1園），10名（1園）

②何歳児に多かったか

0才―6名，1才―10名，2才―5名，3才―4名，4才3名，5才―2名

③風邪をこじらせないための対処法

毎日検温（28園 19.3%），風邪をひいた子供は休ませる（9園 6.2%）

その他（自由記載）

親，職員ともに健康状態の把握に努めた，登園した園児の健康チェックをする，健康診断を十分に行う，検温，早めの診断，手洗い，うがい，少しの変化に気をつける

④風邪の予防のために実施している事

手洗い（42園 28.9%），うがい（42園 28.9%），薄着（24園 16.5%），積極的な運動（20園 13.7%）

その他（自由記載）

加湿器の設置，室内の換気，室内の清潔，布団の消毒，お茶うがい，毎日カテキン入りお茶類を水筒に入れて持ってきてもらう，ココアのおやつ，ニンニクスープを毎日飲む，バランスの良い食事，体力増強（マラソンを毎日，月一回マラソン大会，縄跳びを毎日，月一回縄跳び大会），抵抗力対策（乾布摩擦，湿布摩擦）

3．先天性心臓疾患

①先天性心臓疾患の園児がいた保育園の数は31園，患児数46名，全体の園の21%にこの疾患の患児がおり，一園に複数いる場合もあった。

②発作

チアノーゼ（唇が紫色になる）を起こすことがありましたか（2園 4.3%），呼吸困難の発作を起こしたことはありましたか（　0　）

③発作のときどのような対処をしましたか（複数回答）

すぐに横にした（　1園　），半身を高くして休ませた（　0　），暖かくした（　2園　），すぐに保護者に連絡をしてきてもらった（　2園　），主治医に連絡して支持を受けた（　0　）

その他（自由記載）

ほかにも病気があったので母親と連絡（電話，お便り帳）を取り合って保育した，発作は起こしていない，自然にふさがって治った，手術して完治

④日常生活で特に気をつけていること（複数回答）

運動量に気をつけていた（　9園　），睡眠が十分取れているか注意した（　8園　），過激に興奮することがないように注意した（　5園　）

その他（自由記載）

日常生活には差し支えなかった，特別な注意をせず，健常児と同じ生活をしていた，体調のよくない日は室内遊び，体調の変化に気をつけていた，水分補給に気を配る，薬の効果のた

め頭を打たないように注意，熱があったり，体調が優れないときは早めに保護者に連絡する，家族との連携を密にし，特別な活動の時は保護者からの指示を受ける，運動制限はなかったが，運動時の顔色に注意した，睡眠中注意してよく見ていた，年，２回の受診，定期健診の結果，園で注意すべき点を必ず把握し対応した

Ⅳ．障害児について

１．難聴児について

①難聴児がいた保育園数は５園，患児数６名，全体の園の3.4％にこの患児がいた

②難聴児への対応（複数回答）

手話で意思疎通を図った	（　１園　）
母親，または専属の保育士のみが関わった	（　１園　）
危険を避けることが出来るように常に注意していた	（　２園　）
出来るだけ普通の子供と遊ばせた	（　４園　）

その他（自由記載）

主治医との連絡を密にし，指導・様子の情報交換をし，保育を進めた

保護者と相談の上，言語及び精神発達遅滞を伴った児を一学年下のクラスで保育した

③一番困ったこと（自由記載）

伝えようとしていることが伝わっているか分からない，落ち着きがなく，危険をしらせる時に呼びかけでは察知できない，他の子供と遊べない，補聴器が壊れたとき伝えるのに苦労した

④一番気をつけていること（自由記載）

顔を見て知らせるようにしている，行動が早いので危険を感じたら近くに行くように心がけている，口を大きく開けてゆっくり話し，言葉に出していえるように仕向けていった，危険のないよう，良く把握する，向かい合って，ゆっくり，はっきり動作を交えて話す，眼鏡と補聴器着用のため注意

２．知的障害児について

①知的障害児がいた保育園の数は38園，患児数53名，全体の園の36.5％にこの患児がいた

②知的障害児への対応（複数回答）

母親，または専属の保育士のみが関わった	(14園，37％)
危険を避けることが出来るように常に注意していた	(21園，63％)
出来るだけ普通の子供と遊ばせた	(33園，87％)

その他（自由記載）

補助保育士が援助，専属保育士が援助，基本的生活習慣の指導を中心に困ったとき，自分から意思表示できるよう働きかけた，言葉かけをゆっくり毎日，時間で看護師が養育に関わった

③一番困ったこと（自由記載）

知的障害児の特質・危険が分からない，飛び出しやパニックがある，偏食（食事へのこだわり），午睡中，急に笑ったり，歩き出したり，落ち着かない，何でも口に入れるので目が離せない，排泄をどこにでもしてしまう，友達と関われない，基本的生活習慣が身についていない，指導に関して・注意の仕方が分からない，担任が一人なので，個別指導が出来ない，一対一でないと指示に従えない，専属がいなかったため，他児と一緒に保育し十分手をかけられなかった，集団行動が難しい，一つ一つ保育士が働きかけなければならない，同じ教材が使えない，話が出来ないので，様子を伺い判断しているが，的中しているか分からない，発表会での役を決めるのが難しかった，母親が精神的に不安定で難しかった

④一番気をつけていること（自由記載）

保護者との関係

母親とのコミニケーションをとる，連絡を密にする

知的障害児への対応

気持ちを落ち着かせ，目で知らせながら話しかけその子のよい面を引き伸ばす，本人の理解度に合わせて援助，成就感をもてるような関わり方でやれば出来るという実感を持たせる，時間をかけても一人出てきるように“やってみよう”との意欲を持たせる工夫，言葉かけを多くして少しでも言葉が出るように配慮，自分に自信が持てるように愛情と忍耐で保育，健常児との関わりを持たせる，楽しく過ごせるようにする

危険への対応

危険その都度知らせる，安全の確保・怪我・転倒の防止，担当保育士が常に一緒にいて遊びや生活を援助，パニックを起こさずみんなと一緒に行動できるように他の子に危害を加えないように目を離さない，友達に理由なく噛み付かないように

Ⅴ．精神神経疾患について

1．自閉症児について（自閉傾向，アスペルガー症候群，広汎発達障害等類似疾患を含む）

①自閉症児がいた保育園数は12園，患児数51名，全体の園の8.3％にこの患児がいた

②自閉症児への対応（複数回答）

母親，または専属の保育士のみが関わった	(12)
危険を避けることが出来るように常に注意していた	(26)
他の子供の危険に注意した	(11)
出来るだけ普通の子供と遊ばせた	(37)

その他（自由記載）

担当保育士が専属で保育，全職員が本児への共通理解を持つようにした，基本的生活習慣を中心に指導した，一対一の関係を大切にした

③一番困ったこと（自由記載）

意思の疎通が思うように出来ない，集団の中で活動が出来ないため，一対一となり時間がかかる，生活の流れが変わるとパニックを起こす，パニックを起こしたときの理解と対処が難しい，こだわりがあり話を聞き入れない，気に入らないと奇声を発する，他児の鳴き声が嫌いで噛み付いてしまう，食事の偏食があった，噛み付き，水遊びに困った，保護者が児の疾患を認めない，母親がうつ病で対応が難しかった

④一番気をつけていること（自由記載）

落ち着くように関わる，怪我のないように遊ばせる，常に一緒にいるようにする，一人での行動に注意していた，居場所を常に確かめる，他の子に危害を加えないように注意，母親との共通理解

2．選択的緘黙（場面緘黙）について

①選択的緘黙児のいた保育園の数は１園，患児数１名

②選択的緘黙への対応（複数回答）

母親，または専属の保育士のみが関わった	（　　）
危険を避けることが出来るように常に注意していた	（　　）
表現できない気持ちを表情などで推察するように努めた	（　1　）
出来るだけ普通の子供と遊ばせた	（　1　）
特に母親と連絡を密にした	（　　）
その他（自由記載）	

③一番困ったこと（自由記載）　なし

④一番気をつけていること（自由記載）　なし

3．てんかんについて

①てんかんの児がいた保育園の数は８園，患児数19名，全体の園の5.5％に患児がいた

②てんかんの児への対応（複数回答）

母親，または専属の保育士のみが関わった	（　3　）
危険を避けることが出来るように常に注意していた	（　9　）
精神的に興奮しないように注意した	（　4　）
出来るだけ普通の子供と遊ばせた	（　18　）
特に母親と連絡を密にした	（　13　）
その他（自由記載）	

③一番困ったこと（自由記載）

突然の発作で周りの子がびっくりしてしまう，親から疾患について報告されていなかった，大発作で呼吸の確認が出来なかった

④一番気をつけていること（自由記載）

体調管理に気をつけた，疲労させないように気をつけた，倒れたときに頭を打たないように気をつけた

4．チックについて

①チックの児がいた保育園数は８園，患児数23名，全体の園の5.5%にこの患児がいた

②チックの児への対応（複数回答）

精神的安定が図れるように穏やかにやさしく関わった	（ 10 ）
他の子供たちと仲良くできるように気をつけた	（ 3 ）
遊びに集中できるように配慮した	（ 3 ）
特に母親と連絡を密にした	（ 11 ）
母親の悩みなどの相談に応じた	（ 7 ）

その他（自由記載）

瞬きについて，何も言わずみまもった

③一番困ったこと（自由記載）

性格的なこと，心を開かない，わがまま

④一番気をつけていること（自由記載）

性格にあった対応，本人が気にしないよう対応，チックを強化させないようなかかわりの仕方，母親への連絡

5．注意欠陥多動性障害児（ADHD）について

①注意欠陥多動性障害児がいた保育園数は９園，患児数14名，全体の園の６％だった

②注意欠陥多動性障害児への対応（複数回答）

精神的安定が図れるように穏やかにやさしく関わった	（ 6 ）
分からないときは何べんも良く話して聞かせた	（ 8 ）
他の子供たちと仲良くできるように気をつけた	（ 7 ）
他の子供たちへの影響に注意した	（ 4 ）
特に母親と連絡を密にし，対応を一貫した	（ 8 ）

その他（自由記載）

園の職員側もADHDについて理解するように勉強した

③一番困ったこと（自由記載）

自分の席にじっと座っていられないため，長時間座って活動できるような工夫，午睡中眠れないと大声で笑ったり，しゃべったりする，抑制心がないところ，言葉がうまく話せず，子供たちとうまくコミニケーションがとれずにいた，バスと登園中，いすの上を歩いてしまったため，送り迎えにした

④一番気をつけていること（自由記載）

危険なとき意外はあまり怒らない，他児とのトラブル，他児との和，部屋などから飛び出すので，安全確保につとめる。他の子供たちと同じように生活できるように配慮する，他児に乱暴しないようにする

Ⅵ．その他

1．乳児突然死症候群（SIDS）で死亡した乳児

乳児突然死症候群（SIDS）で死亡した乳児いたと答えた園はなかった。いなかったと答えた園は137園，無回答８であった

2．幼児虐待について

幼児虐待の見られた園は17園で，全体の11％，虐待されていた幼児の数は28名で，複数の幼児が該当する園もあった

表３

疾　患　名	罹患児のいる保育園数	全体での割合(145園中)	罹 患 児 数
アトピー皮膚炎	114園	78.6%	104名
小児ストロフルス	8	5.5	19
喘息	100	68.9	103
肺炎	32	22	104
先天性心疾患	31	21	46
難聴	5	3.4	6
知的障害	38	36.5	53
自閉症	12	8.3	51
選択的緘黙	1	0.7	1
てんかん	8	5.5	19
チック	8	5.5	8
注意欠陥他動性障害	9	6	14
乳幼児突発死症候群	0	0	0
幼児虐待	17	11	28

5．考察

Ⅰ．感染症について

感染症は免疫の形成と，抵抗力の低さから小児にとって避けられない病気だが，罹患児の多さの順は表１のとおりである。

水痘（水疱瘡）は感染症中罹患児数が最大で，一園平均10名が罹患していた。罹患児の多かった月は６月だが調査結果から１年中発生があることが分かり，一年をとおして気をつけなければならない病気であることがわかる。欠席日数は約一週間程度とこれも感染症では一番欠席日数が多くなっている。

次の流行性耳下腺炎は年毎に変化があるが，平成16年度は罹患児が多く二位になっている。予

防注射があるが任意のため普及が進んでいない事が推察される。

とびひは感染力が弱いといわれているが，年少時のいる保育園では三番目に罹患率が高くなっており，油断の出来ない感染症といえる。表２をみると保育士が対応に苦慮し様々な対応がなされているのが分かる。

四位の手足口病も比較的多い感染症で主に夏に多く，欠席日数は少ないが，表２のように洗眼や手洗い，水分補給などの対応が保育士に求められている。

五位のプール熱も夏に多く毎年どの園でも一名は罹患している。

感染症の予防については全ての感染症について罹患児の多い感染症から順に手洗い，うがい，物品の消毒がなされている事が表２から分かる。自由記載では全感染症で手と床の消毒が上げられており，感染予防のため各保育園で手の消毒，床の掃除と消毒が徹底されている事が窺えた。感染症毎に細かい配慮がなされていた。

次に保護者への対応では，主に病気についての説明や，対応について指導しているという結果が得られた。具体的な内容については，お便りや予防接種の勧め，病院の早期受診などがある。保護者に対応している職員については，看護師はわずか20％でおもは担当保育士が当たっていることが分かった。感染症に罹患した子供の保護者への指導を担当保育士が担当することが多いということから，保育士が日々，このような質問に答えられるように様々な病気についての知識を身に付けていなくてはならないことを示唆された。

Ⅱ．小児の皮膚疾患について

小児は皮膚の防衛機構が未成熟な為，皮膚病に罹りやすい特質があるが，アトピー性皮膚炎の園児がいた園は145園中114園で全体の78.6％の園にこの病気の子供がいた。比較的に多いのに驚かされる。症状の重い季節は夏と冬で，発生年齢は０歳が一番多く，２才から５才まで園児に罹患児がおり，長い経過を取る病気である事が分かった。

園生活の中では皮膚の清潔に努めたり，汗をかいたらシャワーで流したり，室温の調整，また子供が痒がったら薬を塗るなどの対応をしている。また食事は除去食を提供している園もあった。保護者に対して指導していることは体を清潔にし，規則正しい生活をさせること，ぬいぐるみに触らせないことなどだった。

ストロフルスの園児がいた園は８園で全体の５％で，少なかった。特に症状の重い季節は夏である。園生活で気をつけていることは，虫に刺された箇所を掻かないように工夫する事，爪を切ることなどだった。保護者へは，ストロフルスについての説明，周囲を清潔に保つようになどを指導している。

今回の調査から、保育士が子供を良く見て対応していることが改めて分かった。また保護者にも適切な指導をしている点には驚かされた。と同時に，保育士の病気についての理解が大切であることが改めて理解できた。

Ⅲ．内臓疾患

気管支喘息の園児がいた園は145保育園中100園で，全体の68.9％と比較的多くの園で見られている。年齢的に見ると，年齢の低いほど多く見られ，発症年齢も０歳が一番多い。症状の重い季節は冬である。園生活の中で気をつけていることは掃除をして清潔を保つようにする事だった。保護者へも清潔を保つように指導している。また発作がおきたときにはすぐに保護者に連絡を取っている。

一年間で風邪から肺炎を併発した小児のいた保育園は32園で全体の0.7％と低いものだった。それには積極的な風邪の予防が影響していると思われる。手洗い，うがいなどの一般的な予防法は約30％とあまり高くは無いが，それぞれの園で様々な予防法や風邪への対処がなされていた。検温，健康チェック，早期受診，体力増強としてはマラソン，縄跳び、乾布（湿布）摩擦，そして薄着やカテキン摂取，ココア，にんにくなどの食事療法も実施されていた。

先天性心臓疾患の園児がいた保育園は31園で，全体の21％だった。罹患児は46名で数はあまり多くないがこの難しい病気の園児が全体の約五分の一の園には存在していることが分かる。対応としては，保護者と緊密に連絡を取り合い，また日常で十分な観察を行ってこどもの状況を常に把握している事が分かった。

Ⅳ．障害児ついて

統合保育は茨城県のすべての保育園で実施されるようになっているが，ここでは難聴と知的障害について調べた。

難聴児がいた保育園は５園，患児数は６名だった。全体の園の3.6％である。難聴児と健常児と遊べないという問題もあるようだが，出来るだけ一緒に遊ばせるという園が多く見られた。どの園も，保育士は難聴児の近くでゆっくり話したり，伝えたりして対応している。また危険がないように十分配慮していることがわかった。

知的障害児がいる保育園は38園，全体の26％，53名だった。この場合もほとんどの園で健常児と一緒に遊ばせていた。しかし，こだわりやパニックなど困ることも多く専属での保育も望まれているようである。また危険への対応がとても大切であることがわかった。

Ⅴ．精神神経疾患について

自閉症児がいた保育園は145園中12園で，園の数は少ないが患児数は51名と比較的多く，一園で４～５名いるという結果となった。このことから，受け入れている園が少ないのではないかと感じた。担当しているのは専属の保育士で，その対応は難しく児の特有の行動に保育士が困惑している様子が伺えた。

選択的緘黙は145園中１園で患児も１名で，きわめてまれな疾患であることがわかった。しかしそれだけにこの疾患に罹患した児がいた場合は対応が難しいことが推察される。

てんかんは８保育園，全体の5.5％患児がいた。その数は19名である。大発作を起こす例も見ら

れ，その場合は命に直結するので，病気の知識とその対応を知っておくことがとても必要だとわかった。またこのような場合園児の安全の確認とともに，他児への配慮が必要であることもわかった。

チックの児は８園，全体の5.5％おり，患児数は23名だった。チックは精神的な問題が多く，その子供との関わり方の難しさを感じた。保護者も悩むことがあるので協力して保育していくことが大切なのだと示唆された。

注意欠陥多動性障害児（ADHD）がいた保育園の数は９園，患児数14名，全体の園の６％という結果が出ている。しかしこの数字は病院で確定診断されている児の数で，実際はこの疾患が疑われる児は多いのではないか。保育園での対応は大変で保育士たちが突発的な行動で困らされていることが良くわかる。保育士はこの疾患についてよく学び理解していかなければならないと思わされた。しかし保育園でのこの子供たちへのその対応は，穏やかにかかわり，良く話して聞かせ，安全に注意し，母親と連絡を密にし，さらに他児との関係を取り持ち，仲良く遊べるように努めるなど，とても細やかなものであった。保育士達の保育への心意気を感じさせられた。

乳児突然死症候群（SIDS）で死亡した乳児いたと答えた園はなく，いなかったと答えた園は137園であったが，無回答が８園であったことが少し気になった。

幼児虐待の見られた園は17園で，全体の11％，虐待されていた幼児の数は28名で，複数の幼児が該当する園もあった。現在この幼児虐待がとても問題になっているが，現実に145保育園で28名の虐待を受けている幼児がいることに驚いた。無回答が13園あるので実際はもう少し多いかもしれない。幼児や保護者への対応についての知識が必要とされていることが分かった。